

【シンポジウム「徳福不一致に対する思想的応答」提題】

徳福不一致との戦いとしての ギリシャ哲学

野津 悌

拙稿は、2009年12月12日(土)に国士舘大学世田谷キャンパス10号館329教室に於いて開催された倫理学専攻シンポジウム「徳福不一致に対する哲学的応答」の提題者として読み上げた原稿の全文である。掲載に当たっては、本文には手を加えず、注により補足的説明を付与するにとどめた。

序 「徳福不一致」への憤り

皆さんは「立派な人間」という言葉を聞いてどんな人を思い浮かべますか。「そんな人はいない」とはいわないでください。素直に考えた場合、尊敬に値する「立派な人間」というものがいるはずです。そのような人間を皆さんそれぞれ思い浮かべてみてください。そしてその人がその人にふさわしくない境遇に陥っている様子を思い浮かべてみてください。それが「徳福不一致」という状況です。ではこの「徳福不一致」に対して皆さんはどんな感情を持つのでしょうか。当然、皆さんは「憤り」を感じるのではないのでしょうか。

わたくしは、この「徳福不一致」について、西洋古代・中世思想という範囲の中で考えてみたいと思います。古代ギリシャの人々もまた我々と同じように「徳福不一致」に「憤り」を感じていました⁽¹⁾。哲学者アリストテレスは、立派な人は悲劇の主人公としてふさわしくないと言っています⁽²⁾。立派な人の悲劇を描くと、悲しみを通り越して憤りを呼び起こしてしまうからだといえます。

さてギリシャ哲学は、ある意味で、この「徳福不一致」への「憤り」から生まれました。ご存じのとおり、ソクラテスは彼の問答活動によって忌み嫌われ、アテナイ市民により訴えられて、死刑判決を受け、殺されてしまいました。これに憤ったのが当時27歳のプラトンです⁽³⁾。プラトンは、ソクラテスに対するこの不正な扱いに大きな「憤り」を感じて、ソクラテスを主人公とする対話の執筆をはじめます。そこでプラトンはソクラテスその人を自分の著作の中に登場させ、ソクラテス自身に「自分が不幸ではなかったこと」

を論証させようとしします。こうして倫理学としてのギリシャ哲学がはじまるのです。このように考えるとギリシャ哲学はまさに「徳福不一致」に対する思想的挑戦としての意味を帯びてきます。そしてこの挑戦を始めたのは、まさに死刑に処されたソクラテスその人であったことになるのです。

1 : 「徳福不一致」とギリシャ哲学

1-1 : 「幸福」と「徳」

ところで我々は「徳福不一致」を認めながら実は「徳」ならびに「幸福」について明らかな概念を持たずにいます。ギリシャ哲学が着目したのはこの点です。ギリシャ哲学は「幸福」と「徳」の概念を明らかにすることで「徳」を有する人は「不幸」ではありえないことを証明しようとしします。

さて我々は、「幸福」を何らかの「善いもの」を獲得することであると考えています。とは言え、何を「善いもの」とみなすのかは人によってまちまちです。しかしそのような「善いもの」の候補をあつめてグループに分けることができます。アリストテレスはそのような「善いもの」を三つのグループに分類しています⁽⁴⁾。

第1のグループは「魂のよさ」です。いわゆる「徳」のことです。例えば「正義」「勇氣」「節制」がこれです。第2のグループは「身体のよさ」。つまり身体における優れた状態です。例えば「健康」「美しさ」「強さ」「体の大きさ」などがそれです。そして第3のグループは「魂にも身体にも関係しない善さ」です。「財産」をはじめとする広い意味での「所有物」、「家族や子供に恵まれること」「名声名誉」などがこれに当たります。アリストテレスはこれら3つのうち「魂のよさ」を「内的善」と呼びます。自己自身を原因として生じる「善」であるという程の意味です。またアリストテレスは残りの2つを「外的善」と呼びます。外部の助けをかりて手に入れる「善」という程の意味です。なお、この「内的善」「外的善」という区別⁽⁵⁾がこれから先の話の中で決定的な意味を持ちますのでよく憶えておいてください。

さて、我々は今お話しした「善いもの」の三つのグループのうち、ひとつないし複数のものを、それぞれの嗜好に応じて、「幸福」を構成する「善いもの」と考えます。すると「徳福不一致」が生じる原因が明らかになります。というのは、少なくとも「外的善」を「幸福」の不可欠の構成要素と考える

人であれば、「内的善」すなわち「徳」を持っていたとしても「外的善」を手に入れていなければその人は「不幸」である、と考えざるをえないからです。しかしその一方で「徳福不一致」を回避する道があることもわかります。それは、「幸福」の構成要素としての「内的善」の特権的な地位を明らかにすることです。つまり「内的善」さえあれば「外的善」を手に入れていなくても「幸福」でありうることを示すことです。要するに、「徳」さえあればそれだけで「幸福」であると論ずることです。これがギリシャの哲学者たちが目指した基本的な戦略です。

1－2：ソクラテスの場合

「内的善」すなわち「徳」の特権性を示そうとした最初の哲学者がソクラテスでした。ソクラテスは「徳」を「知恵」と同一視して、「知恵」の有無が「幸福」であるか否かを決定的に左右すると考えます。ソクラテスは言います。「金銭をいくらつんでも、そこから徳が生まれてくるわけではなく、金銭その他のものが、人間のために善いものとなるのは、すべては徳による⁽⁶⁾」と。つまりソクラテスによれば「徳」を獲得していない人にとってその他の善などありえないことになります。ソクラテスが「徳」の特権性を認めていることは明らかです。

もっともソクラテスの主張は未だ控えめです。ソクラテスの主張は「徳がなければその他の善は善たりえない」ということにすぎません。「徳があれば、その他の善を失うことはありえない」とまでは、彼は言っていません。このことからすると「徳」ある人が「外的な善」を失う可能性は未だ残っていることになります。

またソクラテスは別の意味でも控えめです。彼は自らを「徳」すなわち「知恵」を有する者としてではなく、あくまでも「知恵」を愛し求める者としているからです⁽⁷⁾。従って、彼は「徳」すなわち「知恵」をこれから手に入れようとしている段階にあることになります。彼自身、自分が「幸福」を得るにふさわしい人間であるとは未だ認めてはいないことになります。

もっとも『ソクラテスの弁明』を読む限り、そこに登場するソクラテスが自らの死の運命を不幸であると考えてはいないことは確かです。ソクラテスによれば、「死」を怖れるということは「知恵がないのに、あると思っていること⁽⁸⁾」だとされます。なぜなら本来「死」というのは人間にとって善であるか悪であるかわからないものだからです。ソクラテスは死という善悪不

明なものと「アテナイ人のために問答活動を行う事、という彼に与えられた職務の放棄」という彼にとっての明確な悪とを秤にかけます。そして理性的な判断に従い、明確な悪を避ける代償として善悪不明なものの方を引き受けることを決然として選択します⁽⁹⁾。すると、ソクラテスが死刑になったことは、明確な悪の回避という意味を持ちます。つまりソクラテスの死はソクラテス自身にとっては「不幸」ではなかったことになります。要するに、ソクラテスには「徳」と「福」の不一致は生じていなかったということにもなるわけです。

1－3： ストア派の場合

さて既にお話したように、ソクラテスにおける「徳福不一致」に対する戦いは未だ控えめです。しかしソクラテスがはじめた「徳」の特権性の証明という仕事は、ヘレニズム時代のストア派によって徹底化されます。

ストア派は、「内的善」としての「徳」すなわち「知恵」の特権性を主張すると同時に、「幸福」の構成要素から「外的善」を完全に排除してしまいます。ストア派はあらゆる事物を「自分の自由になるもの（権内にあるもの）」と「自分の自由にならないもの（権内にないもの）」に区別します⁽¹⁰⁾。「自由になるもの」とは「意見（思考）」「意欲」といった魂の働きです。他方、「自分の自由にならないもの」とは「肉体」「財産」「評判」といった、幸運が支配する領域、つまり魂の働きによらないものです。ストア派によれば、本来「自分の自由にならないもの」を「自分の自由になるもの」と勘違いしてしまう「愚かさ」すなわち「無知」が人に「悲しみ」を引き起こし「不幸」をもたらす原因であるとされます。従って、「自分の自由にならないもの」と「自分の自由になるもの」とを区別する「知恵」すなわち「徳」を獲得しさえすれば、その人は決して「不幸」にはならないことになります。これがストア派のいう「アパテイア」すなわち「無感情」という賢者の「幸福」です。

このようにストア派によれば、人は「徳」すなわち「知恵」を獲得しさえすれば「幸福」だということになるので、ストア派は「徳福不一致」に完全に勝利したことになります。しかしその代償は決して小さくはありません。ストア派は「幸福」の構成要素を「徳」に限定してしまうことで「幸福」の内容を極端に乏しいものにしてしまいました。ストア派は「金銭」も「名声」も「友人」や「家族」さえも「幸福」の構成要素から除外します。のみなら

ずこれらの「外的善」を失うことから生じる人間的な感情を愚か者のしるしとして蔑みます。家族や子供や友人の死を嘆く者は愚か者だということです。こうしてストア派の倫理は極めて非人間的な性格を帯びることになります。

1－4： アリストテレスの場合

他方で、ソクラテスやストア派と同様に「徳」の特権性を主張しながらも極めて常識的で人間的な倫理学をつくりあげた哲学者がいます。それがアリストテレスです。アリストテレスは「内的善」である「徳」を、ソクラテスやストア派のように「知恵」に限定しません。彼は「徳」を一層広い意味での「魂の優れた在り方」として理解しました。彼は「徳」を二種類に分けます⁽¹¹⁾。ひとつは「倫理的徳」です⁽¹²⁾。これは社会の中における優れた人柄です。例えば「正義」「節制」「勇敢さ」などがこれにあたります。もうひとつは「知性的徳」です⁽¹³⁾。これは広い意味での学問的な能力です。「知恵」「学問」「技術」などがこれにあたります。アリストテレスはこれらの様々な「徳」をバランスよく備え、さらにこれらの徳を実際に発揮しているということが「幸福」な人であるための条件であると考えます。以上のことからアリストテレスが「幸福」の構成要素として「徳」に特権的地位を与えていることは明かです。

しかしながら、アリストテレスの倫理学は「徳福不一致」への挑戦としては極めて脆弱です。アリストテレスは「外的善」が「幸福」に不可欠の構成要素であることを最終的に否定することができなかったからです。例えば人が「倫理的徳」を備えるためには優れた社会の中で養われることが不可欠です。つまり「倫理的徳」はその個人の生まれや環境という外的要因に依存しています。また「知性的徳」についても同様です。「知性的徳」を獲得するには充分な余暇（スコレー）が必要です。またそれを発揮するためには余暇のみならず研究仲間が必要です。余暇や研究仲間が「外的善」であることは言うまでもありません。アリストテレスの「幸福」は明らかに「運」に依存しているのです⁽¹⁴⁾。

アリストテレスの倫理学の魅力はその健全な現実主義です。しかし一方で彼は「徳福不一致」に対する戦いに完全に敗北しています。彼の倫理学がヘレニズム時代以降の人々の間で不人気であったのはこのためです。ヘレニズム時代以降の人々を魅了したのは「徳福不一致」と正面から対決したストア派でした。それが非人間的な教えであるにもかかわらずです。

以上のようにギリシャ哲学という範囲の中で考える限り、我々は二者択一を強いられます。第一の選択肢は、「徳福不一致」に勝利する代償として非人間的なストア派を選ぶこと。第二の選択肢は、非人間的な倫理学を嫌ってアリストテレスを選び「徳福不一致」に対する戦いに敗北すること。実に不本意な選択肢です。では健全な人間性を維持しながら「徳福不一致」に打ち勝つ道はあるのでしょうか。あるとしたら古代末期の初期キリスト教思想です。次に紀元後5世紀の教父アウグスティヌスの思想を見てみましょう。

2：「徳福不一致」とキリスト教思想

アウグスティヌスのその思想は彼の晩年の大著『神の国』に見られます。この本が書かれた経緯を簡単に説明しておきましょう⁽¹⁵⁾。その頃、キリスト教を国の宗教として受け入れていたローマ帝国を大きな不幸が襲います。首都ローマがゲルマン民族に略奪されるという大惨事です。この事件をきっかけにローマの人々はキリスト教への批判を強めます。ローマ人がキリスト教を受け入れたことがこの惨事の原因であるという批判です。この批判に対して答える目的で書かれたのがアウグスティヌスの『神の国』です。この著作におけるアウグスティヌスの主張によれば、首都ローマに起こった惨事は実は「不幸」ではないことになります。なぜならば、この惨事もまた人類を救済しようとする神の計画の一部に組み込まれているからです。

もともと全ての人類が救済されるわけではありません。アウグスティヌスによれば、神は罪深い人類のうちの一定の人々を救済しこの世の終わりにおいて「神の国」に住ませる計画を立てているのだとされます⁽¹⁶⁾。そして、その人々を救済する目的のもとに、その人々に一定の試練を与えているのだといえます⁽¹⁷⁾。アウグスティヌスは、このような考え方に基づいて、アダムとイブの楽園追放から最後の審判に至るまでの人類の全歴史というものが将来の「神の国」の住民に対して与えられている神による指導であると考えます。

この考え方から帰結するのは、如何なる災いも、それにとまなう激しい感情も、その全てが救いへと至る道であるという考え方です。このことからすると「信仰」即ち「徳」を持つ人間にとって「不幸」はもはや「不幸」ではないことになります。その「不幸」は実は「救い」に至る道に他ならないからです。

このようなアウグスティヌスの思想は「徳福不一致」を根底から覆す力を持っています。しかしこれはあくまで神の計画（摂理）を信じる限りの話です。ここで「徳福不一致」への戦いに勝利しているのは、哲学ではなくむしろ信仰であるということになります。

結語

以上の話をまとめます。ギリシャ哲学においては、ストア派と共に健全な人間性を放棄して「徳福不一致」に勝利するか、あるいは、アリストテレスと共に健全な人間性を維持しながら「徳福不一致」に敗北するかのどちらかになります。その一方で、アウグスティヌスと共に健全な人間性を維持しながらしかも「徳福不一致」に対する勝利を目ざすとしたら、信仰を前提とせざるを得なくなります。

我々はどうしたらよいのでしょうか。あくまでも理性的態度にとどまる限り、結局我々はソクラテスの地点に戻らざるを得ません。「徳福不一致」に対する戦いはソクラテスによって始められ、実はそこから一歩も進んでいなかったと言えるのかもしれません。

注

- ⁽¹⁾ 古代アテナイは「福徳不一致」への憤りに対処するために「追悼弁論」という文学ジャンルを作り出した。ポリス間の抗争という日常の中で、戦争は「福徳不一致」が最も多く見られる場面である。戦場の勇士達はまさにその「勇敢さ」ゆえに「非業の死」を遂げるからである。そこで当時のアテナイは、戦闘が終わる度に戦死者たちのための国葬を開催し、その都度ポリスが選出した傑出した弁論家による「追悼演説」を開催した。そのような「追悼弁論」の一例としては、紀元前4世紀アテナイの弁論家ヒュペレイデース作『追悼弁論』（『国士館哲学11号』52-64頁に拙訳がある）を参照。
- ⁽²⁾ アリストテレス著『詩学』13章（中央公論社、『世界の名著8アリストテレス』所収、藤沢令夫訳、307頁上段19行～308頁上段1行）に「りっぱな人間が幸福から不幸へと転ずるさまが示されてはならないこと。なぜなら、そのような情景は恐ろしくもいたましくもなく、ひどいことだという憤慨をあたえ

るだけであるから。」とある。

- (3) プラトンは、晩年に彼が書いた書簡の中で、ソクラテスを「当時のひとびとのなかで一番正しかった」人と呼び、そのソクラテスが「まったく非道きわまる、だれにもましてソクラテスには似つかわしからぬ罪状」を押しつけられて死刑に処せられたと述べている。詳しくは、プラトン著『第七書簡』（岩波書店『プラトン全集14』所収、長坂公一訳、109頁3行～110頁12行）を参照。
- (4) アリストテレス著『弁論術』1巻6章（岩波文庫、戸塚七郎訳）を参照。
- (5) 『ニコマコス倫理学』1巻8章（岩波文庫、高田三郎訳）を参照。
- (6) 『ソクラテスの弁明』17節（岩波書店、『プラトン全集1』所収、田中美知太郎訳、85頁2～4行）より引用。
- (7) 『ソクラテスの弁明』6節（同上、62頁8～12行）におけるソクラテスの次の言葉を参照。「この人間より、わたしは知恵がある。なぜなら、この男もわたしも、おそらく善美のことがらは何も知らないらしいけれども、この男は、知らないのに、何か知っているように思っているが、わたしは、知らないから、そのとおりに、また知らないと思っている。だから、つまりこのちょっとしたことで、わたしの方が知恵があることになるらしい。つまりわたしは、知らないことは、知らないと思う、ただそれだけのことで、まさっているらしいのです。」
- (8) 『ソクラテスの弁明』17節（同上、82頁6行）より引用。
- (9) 『ソクラテスの弁明』17節（同上、82頁6～17行）を参照。
- (10) エピクテトス著『要録』1節（中央公論社、『世界の名著14、キケロ、エピクテトス、マルクス・アウレリウス』、鹿野治助訳、385頁上段1～6行）を参照。
- (11) アリストテレス著『ニコマコス倫理学』1巻13章（同上）を参照。
- (12) アリストテレス著『ニコマコス倫理学』2～5巻（同上）を参照。
- (13) アリストテレス著『ニコマコス倫理学』6巻（同上）を参照。
- (14) 例えば、アリストテレス著『ニコマコス倫理学』1巻8章（同上、39頁3～7行）で、彼は次のように述べている。「だがまた、幸福は、上述のごとく、明らかにやはり外的な種々の善をこの上になお必要とする。けだし、うるわしい行いをなすということも、そのてだてのつかないひとにあっては不可能であり、でないまでも容易ではないからである。多くの行為は友や富や政治的な力をいわば用具とすることによって達成されるのであり、またひとがそれを欠く

ときには至福に曇りを生ずるというごとき場合もある。たとえば、生まれのよさとかよき子供たちとか、容姿の美とか。」

- ⁽¹⁵⁾ 『神の国』については、『アウグスティヌス著作集（第11巻～15巻）』（金子靖勇他訳、教文館）を参照。なお、アウグスティヌスが同書を執筆することになった経緯に関しては、アウグスティヌス著『再考録』第2巻43章を参照（『アウグスティヌス著作集（第11巻）』に邦訳がある）。
- ⁽¹⁶⁾ アウグスティヌスは、「天の国、あるいはむしろこの死すべき世においては寄留し、信仰によって生きている天の国の一部分」が「贖いの約束と、そのいわば保証としての聖霊の賜物とを受けている」（『アウグスティヌス著作集（第15巻）』70頁10～13行）と主張する。もっとも、彼によれば、最後の審判以前には「天の国の一部分」の構成員が誰なのかを知ることができない。それゆえに彼は「この国は、敵対者たちの中にさえ、将来その民となる者たちが隠れていることを心にとめるべきである」（『アウグスティヌス著作集（第11巻）』95頁11行）と述べ、そのような「敵対者たち」が「矯正されることに絶望してはならない」（同書96頁6行）と述べるのである。
- ⁽¹⁷⁾ アウグスティヌスはこの点に関して、例えば次のように述べている。「すべて教会の敵が、どのような誤謬によって盲目となり、どのような悪意によって墮落しているにせよ、教会を肉体的に苦しめる力をもつ場合には、教会の忍耐を鍛えることになる。ただ悪しき意見によって対立している場合には、教会の知恵を鍛える。さらには、教えの説得によるにせよ、おそろしい罰によるにせよ、敵を扱う場合には、敵をも愛するように、教会の善意と善行を鍛える。こういうわけで、不信の国の君主である悪魔が、この世に寄留する神の国に対して自分の軍隊を動員しても、いかなる危害を加えることも許されていない。」（『アウグスティヌス著作集（第14巻）』373頁6～11行）